

小田実全集（評論 第13巻）

基底にあるもの



講談社
小田実全集
Makoto Oda

目次

はじめに

基底にあるもの

10

I 人びとにかかわる

天下国家のこと、人間のこと——堺利彦と彼の『家庭の新風味』について——

32

共通一次試験

42

ニューヨーク市バウエリイ街'76・その他

48

「体験」を伝えることは困難だが「体験」を学びとることはできる

60

土俵をつくりなおす

66

II 世界にかかわる

テンノウヘイカよ、走れ

82

日本人と朝鮮人

105

朝鮮を全体としてとらえること

115

息子たちがやって来た

対話について、ことばについて

誰の眼にもあきらかであるはずのこと

オリンピックと安保と予備校と

III 文学にかかわる

「現在」を書くこと——李恢成の『見果てぬ夢』にかかわって——
シュラ場で

「表現を奪われる」「表現を奪う」

「詩心」と「小説心」

アリストテレスとロンギノス——「文強」の修辞学

現実をどう書くか

「生き永らえる」力・あるいは、革命について——追悼武田泰淳

中野さんへの注文

ジェイムス・ジョーンズ追悼

地理通りの作品

「市民文学」を考える

戸村一作さんの絵のこと、「日本の伝統」のこと

「大阪の作家」の話から

おわりに

「コロノスのオイデイブス」

あとがき

基底にあるもの

はじめに

基底にあるもの

1

私があるのを知るとは、どういうことかを自分なりに熱心に考えるようになったのは、三年前、「北朝鮮」——朝鮮民主主義人民共和国へ行ったときからのことだ。もともと、この私の自分自身に対する設問には、そこへの三週間の旅はじかにかかわってはいない。設問のもととなつたのは、若い在日本朝鮮人の知人（かりに名前をAとしよう）の「行って、祖国のいいところもわるいところも見て来て欲しいんです」という行くまえのことば、というよりはたのみだった。そのたのみには、祖国のことを知りたいという痛切な思いがこもっていた。普通なら知っていて当然のことを知ることができないという悲しみ、怒りの気持もあきらかにあつた。日本人であるあなたが行けて、自分に行くことはできないという悲しみ、怒りの気持もあきらかにあつた。そのすべてで、見て来て、見たことをしゃべって欲しい。わたしは祖国のことを知りたいのだから。そう彼女（Aは女性だった）は言っていた。

Aが祖国について無知な女性であつたというのではない。朝鮮総連がたてた「民族学校」の出身者で、朝鮮のことは「北朝鮮」と言わず韓国と言わず、よく勉強して知っていた。朝鮮語も「民族学校」に小学校の段階から行っていたのでよくできた。日本語も日本の社会で育つて何不自由なかつたから、

彼女のような場合がまさに「バイリンガル」というべきものだろう。祖国のことばもしつかり体内にあったせいか、これは「民族学校」教育のひとつのかくれもない成果だと言えるが、まぎれもなく朝鮮人として自分を認識しているようだった。私は彼女から、「北朝鮮」と言わず朝鮮全体についてよく教えてもらっていた。

そのAがそんなことを言う。そのことば、いや、たのみは私をおどろかせたが、しかし、うなずいた。見るかぎりのものは見、知るかぎりのものは知るつもりだ。私はそんなふうな意味のことを言った。

三週間、彼女のそのことば、たのみもあつて、たしかに懸命にいろんなものを見て歩いた。知識もかなり身につけた。それから帰つて、私の見たかぎりのこと、知ったかぎりのことを彼女に告げ、書きもした。

2

私が書いたことはすでに『私と朝鮮』（筑摩書房）のなかにおさめたのでそちらを見ていただきたい。その私の見たこと、知ったことの当否をここで論じようとしているのではない。ここで書きたいのはこの文章のはじめに書いた、ものを知るとはどういうことか——そのことだ。それを彼女のたのみにかわらせて考えてみたい。

私は今さつきAは「北朝鮮」についてよく勉強している女性だと書いた。実際、そのもろもろについてよく知っていた。そのよく知っている女性に私の知ったかぶりの知識を告げるのは奇妙な話だ。その奇妙なことをあえてしなければならない必然（は今の政治のありようからかたちづくられている）

については彼女のことばが十分に説明してくれているにちがいない。もちろん、たった三週間の旅のことだ、彼女が訊きたかったことでこちらが答えられないことも多々あった。私が現地で知ったことを彼女がすでに本で知っていたのも数多くあった。それから、やはり、本で読み、学校で教えられて来たことでは十分でないこともたしかにあつて、彼女の知識の不足を私がおぎなつてやることができた。

Aが祖国について知ろうと必死になつていたのは、知識を体内にたくわえて、「北朝鮮」についてのもの知りになろうとしたためではない。あるいは、日本における自分のもろもろのために使おうとしたためではない。目的は、口にそうとあからさまに言つていかなかったが、はつきりして、それはそうすることで朝鮮人になる、すくなくともより確固とした強いかたちでそうあるためだった。

なるほど、そういうことかと納得できたのは実は「北朝鮮」から帰つて来て、彼女の質問責めにあつていたときだ。彼女ぐらいつかり朝鮮人を体内にもつていると見られる在日朝鮮人でもそんなんだなとウカツなことにやつとそのとき判つた。それから、ものを知るとはどういうことか、考えるようになった。

3

Aには老いたる両親がいるが、彼らはさつきちよつとふれたように在日朝鮮人の「一世」だ。朝鮮に生まれ、育つて、日本に来た。もうそれで五十年になるといふ話だが、彼らの場合ね、からの朝鮮人として日本に来て、日本でくらしして来たのだが、どこへ行くのが、どこでくらしが、彼らが朝鮮

人であることは自他ともに自明のことからであり、そこにおいてなんのゆらぎもない。Aに電話をかける時、ときどき両親が出て来るが、彼らの日本語は誰が聞いても朝鮮人の日本語だ。それに対して、Aの日本語は誰が聞いても日本人の日本語だろう。そして、Aの場合、ほとんど完全に近い「バイリンガル」で、朝鮮語のほうも誰が聞いても朝鮮人の朝鮮語だ。

Aの老いたる両親の場合、彼らの「朝鮮人性」の根になる朝鮮はそこに生まれ落ちたときからまわり自然に存在している朝鮮で、その朝鮮をとらえてわがものとして朝鮮人としての自分をきずき上げるために、べつに朝鮮を「知る」必要はないにちがいない。ちよつとキザな言い方をすれば、彼らが朝鮮を知るのではなく、朝鮮が彼らを知るのであって、朝鮮は彼らの誕生を知るとともに容赦なく彼らの内部に侵入を開始するのである。そこで彼らの自由選択はきかないし、逆に朝鮮を知るために彼らはべつに努力をする必要もない。ただ、朝鮮人でありさえすればよいのだ。

Aの場合はまさにそのところが逆になっているように見える。朝鮮は自分からはるかかけ離れたところであり、彼女をとりまくものは日本という異質の環境であつて、そこで彼女が朝鮮人であるためには、まず、なんとしてでも朝鮮を知り、その「知る」という行為によつて朝鮮を自分の体内にとり込んで行かなければならない。こんなふうに考えれば、彼女と彼女の老いたる両親とは、朝鮮を「知る」と朝鮮人で「ある」ことがまさに逆の関係になっているのが判るだろう。両親の場合、「知る」が「知る」に先行している。Aにあつては、「知る」ことが「ある」ことを指向している。「知る」という行為——運動がまずあつて「ある」という存在が出て来る。両親の場合は、もちろん、そこが逆になっている。

「ある」という存在の様態はそれなりに安定しているにちがいない。朝鮮人であることにおいて、Aの老いたる両親はゆらぎがないのだ。朝鮮を「知る」という行為についても、たとえ、その積極的な行為がそこで行われていなくても、彼らは朝鮮のことは、そんなことは、今さら知ろうとしなくても生まれたときから「知っている」ということになるにちがいない。「知る」は「知っている」に自然に移行して、運動よりも存在の様態を示している。朝鮮人で「ある」から朝鮮を「知っている」——二つの存在が確固として彼らの体内にある。そこで彼らの「朝鮮人性」にゆらぎがない。

Aの場合はそうはいかない。逆のことになる。

「知る」という行為は本質的に運動であって、安定を欠いている。しかも、この運動にはかぎりがない。朝鮮を「知る」は朝鮮人で「ある」にむかつて動くが、「知る」行為に限度がない以上、「ある」はいつでも不安定なものになる。朝鮮のことを知っても知っても、自分が朝鮮人で「ある」ことに不安は残る。逆に「知る」行為をやめれば、たちまち私たちは朝鮮人であっても内実は朝鮮人でないことになりかねない。Aの老いたる両親の場合、「知る」という運動は「ある」にひきつけられてほとんど「知っている」という存在になった。Aの場合、「ある」は「知る」にひきつけられて運動の様態を呈する。

もちろん、「朝鮮人の血」ということはある。「朝鮮人の家庭」というものもある。しかし、そのな

かにも外部の日本は容赦なく侵入して来る。それは、朝鮮生まれ、朝鮮育ちのね、つからの朝鮮人（Aの家庭では冗談まじりにそういう朝鮮人のことを「国産」と呼ぶ）である老いたる両親のひきいるAの家庭を見ていても判ることだ。なるほどAは朝鮮語がよくできるが、それが両親がほとんど朝鮮語でしゃべっているという家庭のせいでないのは、他の兄弟姉妹たちにはほとんど朝鮮語ができないのが何人かいる事実で判ることだろう。彼女が朝鮮語ができるのはAが「民族学校」へ行き、そこで朝鮮語を知り、懸命に勉強したからだ。それは「知る」行為の結果であつて、決してはじめから「ある」ものとして彼女の体内にあつたわけではない。逆に、彼女の日本語はべつに彼女は勉強したわけではなかった。それは生まれ落ちたときから容赦なく彼女の内部に侵入して来るものとしてあつて、いわば、はじめから彼女は日本語を「知っていた」。

彼女の老いたる両親が生まれ故郷の済州島にしばらく帰っていたことがあつた（ここで、この文章主題とは直接かわりあひはないが、Aの家族の「国籍」構成についてふれておきたい。「知る」と「ある」との関係についてのAの健気な努力もその「国籍」構成の複雑さのなかで行われていることに留意しておきたいからである。彼女は、日本政府の便宜的分類に従えば「北朝鮮」系朝鮮人だとみなされている「朝鮮籍」の持ち主だが、数多くいる彼女の兄弟姉妹には自らの意志、思想、都合にしたがつて「朝鮮籍」「韓国籍」双方がいる。両親はその墓参のため、「朝鮮籍」を「韓国籍」に切りかえた。もつとも両親にしてみれば、彼らが生まれ、育つた朝鮮は「南北」の区別などなかった、全体として日本に支配されていた朝鮮で、そんな区別などあとからつくられたものだけということになるにちがいない。Aの姉のひとり、他の兄弟姉妹同様日本生まれの、日本育ちだが、自らの意志、思想

に基づいて、身よりの誰ひとりない「北朝鮮」に十七年前に高校生の身で単身帰国している。その墓参での両親がいなくなつたときのさびしさをAは次のように表現していた。「家から朝鮮がいなくなつたみたいでさびしい」。

6

もちろん、朝鮮を「知る」という行為は朝鮮が「ある」という存在を前提にしている。ことばを変えて言えば、「知る」朝鮮は「ある」朝鮮からかたちづくられるものだ。そんなことは自明の話だが、ただ、「ある」朝鮮は「知る」朝鮮となつてそこで終るわけではない。私の場合はそこですくなくとも朝鮮にかかわつては終りだが、Aの場合、彼女はその過程によつて朝鮮人になろうとするのだから、過程の回路は閉じられないで朝鮮にむかつて開いている。ただ、その朝鮮は自分の「知る」対象となつた「ある」朝鮮ではなく、自分の朝鮮人としてのこれからの存在、生き方がそこに込められているゆえに未来にむかつて開かれた「あり得る」、さらにもう一步進めて「あるべき」朝鮮であるにちがいない。彼女はそのことのありようを、「祖国」ということばは、ただの「故国」とはちがつて、自分のこうあれかしと希う気持が込められたことばだとうまいぐあいに説明していた。「故国」はたしかに故郷と同じように過去をむいていることばで、それは所与の存在としてすでにあるもので、こちらからどうしようという筋合いのものではないにちがいない。それに対して「祖国」は、もつと未来に可能性として開かれていれば、空間的に横に人びとひとりひとりにも開かれていて、「祖国」というとき、人びとは多かれ少なかれそこに「参加」する自分を感じている。

そして、もうひとつ、大事なことがある。その「祖国」はこの一連の過程のはじまりにあった「故国」にくらべていちだんと高いところにたっている。ということは、そこに「参加」している人びともいちだんとはじめのときよりも高みにたっているということだろう。

私はAのことをそんなふう聞いていた。

7

究極の「あるべき」朝鮮としての祖国がそんなふうにしていちだんと高みに立つことで、Aの「ある」↓「知る」↓「あり得る」↓「あるべき」という一連の過程は次第に高みへ上昇して行く過程としてあると見ることが出来る。究極の「祖国」——「あるべき」朝鮮が一連の過程を高みに引き上げて行くのである。

ここで念のために、高みへ昇りつめて行く過程だからと言って、ひたすらなる賛美から始まってその極致に至るといふ過程ではないことをことわっておきたい。「北朝鮮」を賛美する文章のなかには往々にしてそういうのがあるが、Aの過程はそうした「北朝鮮」自体を本質的なところで馬鹿にした過程でないことはAの名誉のために言っておこう。究極のところ彼女が考える理想の「祖国」が高みにあることは話をしていると感じとられて来て、それゆえに過程のはじまりの「ある」朝鮮に対して彼女は手きびしいものがあつた。「ある」↓「知る」↓「あり得る」↓「あるべき」の一連の過程は、逆に「あるべき」から「ある」を見返して行く過程でもあつて、そのとき、「知る」という行為はそのまま現に「ある」朝鮮を批判する行為になつていた。

人はもし本気に「あるべき」朝鮮を「祖国」の未来として考えるなら、できるかぎり多くの「あり得る」朝鮮を考えるだろう。それは最大多数の可能性からもっともいいものをえらび出すのが当然だからだ。逆に言うと、人がもしできるかぎり数多くの「あり得る」朝鮮を考え出すことに努めないかぎり、まして、先験的に決められた道としてただひとつの「あるべき」朝鮮を「祖国」におしつけるなら、それは決して「祖国」のことを真剣に考えたことにはならない。まとも上げて言えば、「あるべき」朝鮮は「あり得る」朝鮮のふり幅をひろげる力としてあつても決してそれを狭めひとつの道にやみくもに収斂させるものとしてあつてはならないものだ。

そこまで話を押し進めて行くと、「知る」という行為も、存在としての「ある」朝鮮からできるかぎり多くの可能性をひき出す作業としてあることになる。「ある」朝鮮をまるごとうつしとるという行為が「知る」ことではない。すでにでき上った所与の、したがって変革不能の存在としての朝鮮を変革可能な運動としての朝鮮に変える——それが「知る」という行為の中身だ。

現実のAの「ある」朝鮮から「知る」朝鮮に至る、さらにそこから「祖国」にまで至る一連の過程がそこまでのひろがりと深さをもっていたとは言えない。ただ、Aが言い出した「祖国」うんぬんのことばは、彼女の過程を押し行けばそのあたりにまで達することのできるといふ可能性を示唆していた。

8

「知る」という行為にはいろんな要素がある。本を読んで必要な知識を身につけるといふこともあれ

ば、澄みわたった眼でものごとをみつめて何ごとかを知覚するということも有効な「知る」ための方法だろう。あるいは、感じる、感覚する。たとえば、肌ざわりというものは何も女性の肌や洋服の生地についてだけ言われるものではない。ひとつの社会、国家にだつて言い得ることだろう。あるいは、そこで歩いてみて判るといふことも、靴のはき心地だけにかぎらない。大きく言えば、労働が「知る」という行為にかかわっている。手足を動かすのは昔から「知る」ために必要なことだ。いや、手足を動かしてみではじめて体得できることがらはいくらでもある。

こうしたさまざまな要素からなる行為によつて、朝鮮は「ある」朝鮮から「知る」朝鮮となるのだが、それはそれだけ自分のからだの外にあつた朝鮮がからだの内に入って内在化されて行く過程でもある。同時に、これまでに何度も書いて来たように、朝鮮はそこで存在の形態をもつものから運動の形態をもつものに変つて、からだのなかで自由に動き始める。その自由な精神の動きから生み出されて来るのが想像力の働きで、これは「運動する」朝鮮にかかわつて「あり得る」朝鮮をさまざまにつくり上げて行く。この過程で、精神は、いわば、想像力の翼をもつて遊んでいるのである。遊ぶことで、自由奔放に「あり得る」朝鮮の姿かたちが多種多様、ゆたかなものになる。たとえば、「ある」朝鮮の真面目さ——やりきれないそれにパロディが考え出され、ぶつつけられるのもその過程においてのことだ。

ただ、そのさきに「祖国」がある。「祖国」形成への「参加」がある。「参加」は「あり得る」朝鮮から「あるべき」朝鮮を選びとらせる。その道に全体の過程を押し進めて行く。いや、それが「あるべき」朝鮮をそこで選択しながら全体の過程を高めへ引き上げ、上昇させる。

私の眼にはAの朝鮮を「知る」ことから始まる一連の過程は、いや、現実の過程そのものよりはそれが示唆するものは、そんなふうなものとして見える。

9

「参加」はたたかいをともなう。それを必然にする。

ここらでAとAの「祖国」から離れて考えてみよう。「あるべき」ものが「ある」ものと一致するなら、そんなものは「ある」ものの無難な一変種ではあり得てもとうてい「あるべき」ものではないだろう。また、二つが矛盾なく存在することもまず考えられないことだ。そんなことのありようでは「あるべき」ものが「ある」ものの高みに立っているというふうにはなっていないにちがいない。いきおい、「あるべき」ものへの「参加」と「ある」ものとのあいだに衝突が起こる。「参加」が「あるべき」ものの実現をあくまで求めるなら、それはいやおうなしにたたかいとなる。

「参加」、そして、それが必然にするたたかいから、「ある」↓「知る」↓「あり得る」↓「あるべき」の過程を逆にたどって行くことができる。さつきも述べたことだが、「あるべき」ものを求める態度はできるかぎり数多く多様な「あり得る」ものを求めるにちがいない。ただ、それだけではそのふり幅は無限にひろがる。どんな荒唐無稽なる「あり得る」ものもそこに登場して来るにちがいない。しかし、そのふり幅の無限の拡大、荒唐無稽の登場を許さないのは、私は「参加」だと思う。そこにも自分も「参加」できないものはたしかにおハナシとしては面白いが、それだけのものだ。「参加」はさらに「知る」行為のなかに入り込んで行って、そこに本を読むこと、みつめること、歩

くことなどはちがったやり方での「知る」方法をあたえるだろう。労働することによって判ることが人間にはあるのと同じように、「参加」することによって、結果としてすでに「ある」ものと衝突し、たたかうことによってはじめて眼に見えて来るものもあるのだ。

10

はじめ「知る」という行為の行為者の外にあった「ある」もの——たとえば、ここで、その「ある」ものを「ある」世界としてみよう、それは行為者の「知る」行為によって私の内部に内在化される。同時にその内在化された「知る」世界は想像力の働きによってさまざまに「あり得る」世界となつて展開して行くのだが、その作業はあくまで行為者の内部で行われる。ただ、「参加」は彼の内部で行われるわけにはいかない。それはいやおうなしに彼の外部——現実の状況のなかで行われることで、そこで「参加」は「あるべき」世界を彼の内部から外へ引き出すのだが、ここでも逆の過程を考えることができる。「参加」は彼の内部に内在化された「あり得る」世界にも外の現実からの風をぶちあて、あまりにも空虚にふくれ上つた「あり得る」世界、ただの荒唐無稽を吹き飛ばしてしまうにちがいない。遊びもパロディも必要だが、「参加」がもたらす現実の挑戦を受けてそこにたちむかつて行けるほど強いものでないと、どうにもひとりよがりのひよわなものとなって面白くないのだ。さらにこの「参加」が吹き入れる現実の風は「知る」行為にまで到達して、ここでもまたひとりよがりの閉ざされた観念の空転に大きな風穴をあける。

この「ある」↓「知る」↓「あり得る」↓「あるべき」の全過程に一種の緊張がみなぎっているのは、

「参加」とそれにとまらうたたかいが現実の風をそこに貫通させているからだろう。そして、そこにあるせつぱつまつたもどかしさが感じとられるのは、「あるべき」ものの実現を行為者が自らの「参加」によつて求めながらそれが彼にとつてあたかも永久革命の到達されざる目標のようにしてありつづけているからだろう。どうしようもない不安定さがそこにはある。もちろん、それは、全過程が存在の過程ではなく運動の過程なのだから、まつたく当然のことだ。

11

ときにはその過程が「参加」が開いた風穴から吹き込んで来る現実の風によつてズタズタに切り裂かれてしまうときがある。「ある」と「あるべき」のあいだが激しく切り裂かれてしまつて、どうにもつながらつて行きようがない。生ま身のからだは「ある」世界にとどまつて必死に「あるべき」世界を希求するということはよくあることだ。前者から後者へのへだたりの絶望的なまでの遠さ、深さは「知る」行為によつていやおうなしに眼にあきらかにされて来る。

「あるべき」期待の究極にAは「祖国」を考えとつたが、Bの場合にくらべると、まだ話は簡単であるような気がする。BはA同様に若いしつかりした女性だったが、パレスチナ人で、ベイルートBeirutの難民収容所のキャンプで会つた。Aが日本生まれ、日本育ちの「在日二世」なら、Bはキャンプ生まれ、キャンプ育ちの「在キャンプ二世」だった——とでも言おうか、「故国」を知らないことにおいて、それをもたないことにおいて、そして、「あるべき」祖国を懸命に求めることにおいてはBはAと同じものを共有していた。Bにはじめて会つたのはAと会つたのと同じころだが、そのころAに会えば

B、Bに会えばA、というぐあいに二人の印象が重なった。

Bの場合、ただ、最初の「ある」パレスチナがなかった。すくなくとも現在そこはイスラエルの支配するところになっていて、現実存在するものとしてはない。キャンプには彼女の両親をふくめて「二世」が多く住んでいて、彼らが「ある」パレスチナを、具現していた。そのあたりもAに共通することだから、Bも「ある」↓「知る」↓「あり得る」↓「あるべき」の過程のはてに「祖国」をもっていたが、Aとのちがいはあつて、そのひとつが、彼女の「参加」はパレスチナ解放闘争への「参加」というたたかいかたちをじかにとるものだった。そのたたかいそのものが彼女にとっては「祖国」であつた。そうなつていた。

そこはすつきりしていたが、「祖国」の中身がAのよりも複雑だった。Aの場合、「祖国」は純粹に朝鮮民族だけがかたちづくる「あるべき」朝鮮だが、Bの「祖国」はそういう誰にも理解し納得できるかたちのものとしてはなかつた。いや、それは「祖国」ということばで言いあらわさないほうがよいものなのかも知れない。彼女に言わせると、パレスチナの問題はそれ自体として解決され得ない。唯一解決される時は全アラブ世界の抑圧からの解放がなつたあとのことと、そのためには、現存のすべてのアラブ世界の政権は多かれ少なかれ抑圧政権なのだから今たとえパレスチナ解放闘争と手を組み、支援している政権ともたたかわなければならぬ。ではここで当然そんな途方もないことができるのかということになるが、彼女はそこにしか自分の未来はないと言つていた。そのことばがあつていたのかどうか、テル・ザタールのキャンプに彼女はいたのだが、そこはのちにシリア軍とレバノン右派軍の連合軍によって包囲され、虐殺を受けたキャンプだった。それこそシリアの「反動政権」

の軍隊の手で殺されたのだろうか、今、Bの行く方は判らない。

しかし、それでもまだ、彼女は「あるべき」世界の姿をはつきりと肯定的なものとしてもつていただけよかったにちがいない。そのテル・ザタールから脱出して来たCの場合がちがった。CはBとちがつて頭の禿げ上った中年男だったが、村の組織の長の役のようなことをしていた。アラファト氏の組織にぞくしながら、テル・ザタールにおける敗北の責任を問題にして彼はアラファト氏に対して大いに批判的であり、「あいつは人民を見殺しにしたんだ」とほんとうに彼は吐き捨てるように言った「あるべき」パレスチナの未来に暗い見通しをもつていた。パレスチナ人の解放の可能性が暗いというだけではなかった、解放がなかったあとの未来も暗いというのだ。この調子では未来が非民主的であり、抑圧的なものになると、テル・ザタール以来の体験から彼は話していた。話し終ったところで、「じゃあ、あなたはどうするのか」と私は訊ねた。「この組織を離れるのか。」それは、つまり、BにとつてもおそろくCにとつても祖国そのものであるこの闘争から離れることになると感じたのかも知れない（私もことばを言ってしまうからそう感じて、何故か慄然とした）、彼はすぐ暗い顔で「そんなつもりはない、闘争には参加しつづけて行く」と言った。いや、そのあとの彼の一語がもつとも印象に残っている。「わたしも参加することでのこの闘争は成り立っているのだから。」彼の顔はさらに苦渋にみちたものになつていた。その苦渋にみちた顔を私はまだありありとおぼえているのは、ひとつには翌年またバイルートを訪れた私の耳に、彼は組織のなかで「人民裁判」にかけられて処刑されたという話が入つて来たからだ。ほんとうかどうか、私は彼の行方を探し求めたが、判らなかつた。

こういう苦渋は「参加」には多かれ少なかれついてまわるにちがいない。それこそ絵に描いたように美しい「参加」は現実にはまれなのだ。同じことは「あるべき」もの、「あるべき」世界、「あるべき」祖国……にも言えて、すべては人間の世界のなかの事物だ、絵のようにはきれいに行きかねる。それをきれいにいくと仮定することで、「参加」をただひたすらに美しいものとして強いることで、たとえば、社会主義国家の政治のウソはかたちづくられて来た。しかし、その苦渋にたえかねて、「あるべき」もの、世界、祖国……を放棄することは、「ある」もの、世界、国家……をたとえそこにかのように悪がはびころうがそのままに容認してしまう結果になる。私はここで矛盾に引き裂かれる自分を感じる。

私が「あるべき」ものの実現に「参加」したところで、その「あるべき」もの、あるいは、そこへの「参加」がまちがったものにならないという保証はない。「そら見たことか」というしたり顔が発する声を私は聞くことができる。しかし、それでも私はその「あるべき」もの、その実現への「参加」に身を投じるだろう。それはこの「ある」もの、世界、国家……がまちがっているものとして眼のまえにあるからだ。ここであえて言うっておこう、どう選択するかは究極のところ個人自由意志だ、と。自由意志をどう動かそうが、それは個人の勝手である——その自由な選択の上で、私は、やはり、「あるべき」もの、その実現への「参加」の道を選びとる。

この私にとっての「あるべき」ものは、「祖国」というようなものではない。私自身にそくして言

えば自由な市民であり、他人とのつながりあいでは（それが究極的には社会というものだ）その共生だ。私にはそれがはたして私の未来に実現し得るものであるかどうか、また、その未来がそんなに理想的なものかどうかは判らない。ただ、今私をとりまく「ある」世界にくらべてそれはたしかに「あるべき」世界として私の眼のまえにある。

その「あるべき」自由な市民、その共生を究極のところにおいて、私は私の「ある」↓「知る」↓「あり得る」↓「あるべき」の過程をかたちづくっている。そして、もちろん、これは「あるべき」↓「あり得る」↓「知る」↓「ある」の逆の過程でもある。その過程で起点に立つ「あるべき」「祖国」の視点からAは「ある」朝鮮——「北朝鮮」に対して批判をかたちづくったことはさきに書いた。私も「北朝鮮」について大いに批判をもつが、それは、もちろん、「自由な市民、その共生体」という起点をしつかりと確立した上ではじめて本質的な批判となる筋合いのものだ。

13

「知る」という行為、そこをめぐっての一連の過程にかかわらせて文学のことを考えたい。たとえば、「祖国」を無条件に美しいもの、まちがいのないものとして、そこへの「参加」もまた同じようにとらえるなら、そこから生まれるのは、日本の戦争中にくら見られた戦争賛美の文学となるにちがいない。社会主義リアリズムの安易な文学も同じ筋道の上にある。「祖国」を「社会主義」の一語、あるいは、「祖国」と「社会主義」の二つのことばの結合にとつてかわらせればよいだけのことだ。

もちろん、「あるべき」を捨象して文学を考え、つくり出すことはできる。たとえば、「あるべき」

世界などというくだらぬもの、そこへの「参加」というような子供っぽいことを放り出してしまつて作品を書くことはできる。これもまた作家個人の自由選択の問題であつて私はべつにそれに異をと覚えていたのではないが、「あるべき」世界を放棄するとき、その文学は往々にして「ある」世界のものの一部となる。そこでは「知る」という行為が「ある」世界をなぞるだけになつてしまつて（いかにうまくなぞるかが唯一の問題だ）、そこでは終つて、そこでは「知る」というひとつの運動だつたはずの行為がいつのまにか「知つている」という存在の形態を示して来ているのにちがいない。うまく書いてあるが、なんの「発見」のよろこびもないという作品がそこからあまたつくり出されて来ることだろう。それはもう私たちが今日本の文学の世界でいくらかも見て来ていることだ。

文学作品を読むという行為も、さつきから述べてきた「ある」↓「知る」↓「あり得る」↓「あるべき」の過程をたどることだと考えて行くことができる。まず、読者ははじめ「ある」世界のなかにいる、それこそ、そこに「ある」。文学作品を読んで、その力を借りて、その「ある」世界から「知る」世界へ、存在から運動へ、外のものが内のものへと變つて行つて、その運動のなかで彼も自由になつて、作家と彼自身の想像力の働きを借りて「あり得る」世界のなかに、そのできるかぎり数多いなかに遊ぶのだが、究極のところ彼の魂は「あるべき」世界にまで達する。私自身がそこに「参加」することで達するのだ。

「ある」から「知る」にまで来てそこでとどまる文学に接するとき、読者も同じようにそこにとどまつてしまふだろう。「ある」世界は「知つている」世界で、その「知つている」世界のことを「知つている」世界の住民が読む。いきおい、そこで問題になるのはいかにうまく書くか、といかにうまく世

界が内面化、内在化されるかということだけになる。「あるべき」世界を欠くとき文学は往々にしてこうした様態を示すものだが、作者も読者もそこでもう一步「あり得る」世界の領域にまではいり込んで行き得るかも知れない。たとえば、ここでSFまがいの絢爛たる世界の展開を安易にやつてのけることもできるし、あるいは、「あり得る」世界の配列、結構について手れん手くだをくりひろげてみせることもできる。アルゼンチンの作家コルターサル「石蹴り遊び」を見てみると、後者の才人の芸、ところ狭しとやつてのけているのを見ることができが、そのコルターサルのどこをどうたどつてもいいという一見広大で多種多様の「あり得る」世界が案外狭くてみみちちく貧しいのは、そのあとにつづく「あるべき」世界がなくて、「あるべき」世界が逆に自分に引きよせながら押しひろげてくれる力の展開がなくて、どうにも「ある」世界に結びついてしまっていて、その現実の「ある」世界のもつ狭さ、貧しさ、みみちちさ、そのきまりきった枠組みの幅を乗りこえることができないでいるからにちがいない。ここでコルターサルと対照的に思い浮かべるのはパレスチナの作家ガッサン・カナファーニの作品だが、彼の作品、たとえば、「ハイファに還つて」が「石蹴り遊び」のもたないひろがりゆたかきをもつのは彼が「あるべき」世界を徹底して自分自身の「参加」を通して求めた作家であつたからだ。彼の「あるべき」という当為は「あり得る」という可能性のふり幅を決して狭めてはいなくて逆に大きく押しひろげていて、そこで作品全体がひろがりもてばゆたかにもなっている。

「石蹴り遊び」にどんなに新しがるのことがあろうとも、「ある」世界の延長線上にあつて、いわば、そこから切れたかたちで、それこそ新しい眼で「ある」世界を見ていないので、そこで「ある」世界

を知っても、その知り方はきわめてありきたりの知り方だ。しかし、「ハイファに還つて」を通してなら、私たちは私たちをそこに包み込んで存在しているこの「ある」世界をまったくがった新しい眼で見ることができるとちがいない。その眼の下で「ある」世界は新しいかたちを示して来る。いや、これはもう少し私たち自身の「知る」行為に積極的にかかわらせて言つたほうがよいことだろう。私たちはこれまでになかつた新しい知り方で私たちのまわりの、私たちをとらえ込んで放そうとしない世界を知るのだが、そこではじめてそれまでどうにも突き超えることのできないと見えた「ある」世界の壁にとつて致命的となり得るかも知れない微細な亀裂を発見する。

もうひとつ、「ハイファに還つて」のほかにこういうことを私たちに可能にさせる作品をあげておこう。それはジョイスの「ユリシーズ」だが、その大作を読んで行くことで私たちは現実の「ある」世界の壁に無数の亀裂の存在を知つて行くのだが、それと言うのも、「ユリシーズ」が「ある」⇓「知る」⇓「あり得る」⇓「あるべき」の往復の過程を間断なくくり返している作品であるからにちがいない。それでは「ユリシーズ」の「あるべき」世界とは究極のところでなんだつたのかということになるが、それは、自由な精神をもつた市民の魂の血縁、地縁、あるいは時空の枠組みをさえこえた人類史のひろがりのなかでの共生というものでなかつたかと思う。もちろん、そんなことが現実にはできるとはジョイスは思つていなかっただろうし、また、その「あるべき」自由な魂の結合がそれほどの輝きにみちたとも信じていなかっただろう。ただそこまでのひろがりのなかでことをとらえないかぎり、「ある」世界に人間がとらえられているかぎり、どのようにも人間には動きようがない、ことにユダヤ人ブルーム、アイルランド人ステイブンにとってはそうだと彼は考えたのだろう。彼らがいかに自由

な魂をもってこの世界をいかに自由に動きまわろうとしてもだ。ここで、もちろん、ジョイスのアイ
ルランド独立運動にかかわっての「参加」の投影をよみとることはむしろ容易なことだろう。

I
人びとにかかわる

天下国家のこと、人間のこと

——堺利彦と彼の『家庭の新風味』について——

1

このところ、世の中、保守化の勢いが強い。べつに政治的なことばかり言っているのではない。そんなものは右、左にゆれ動くものとすましてもいいが、たとえば、私が若者のころは、結婚するときには、参会者から会費をとって結婚式をすることが大いにはやっていた。その風俗、ひとつのしきたりとして定着したものと思っていたが、もうそんな会費制の結婚式などどこもやっていないようだ。みんな、親から金をもらって盛大に結婚式をやる。このあいだまで革命の何んのこと言つて騒いでいたのまでが、モンツキハオリの姿で立ちあらわれて神妙に三々九度の盃を受ける。もちろん、そのまえには結納というような人身売買の名残りみたいなものをとりにかわしている。政治の保守化、こういう風俗、あるいは、しきたりの保守化に乗りかかったときに強い。確固としたものになる。

まとめ上げて言えば、家庭の保守化というものがある。会費制結婚式をやつてそれまでにない新しい家庭をかたちづくった私の同年輩の中年、初老にしてからが、そんなていたらくだ。私は今年で四十数歳になるが、同じ年ごろの人たちを見て感じるのは、それぞれに年をとつてそれぞれの「エスタブリッシュメント」になったということだろう。つまり、作家には作家の、政治家には政治家の、

教師には教師の、サラリーマンにはサラリーマンの、八百屋には八百屋の、百姓には百姓のそれぞれの「エスタブリッシュメント」になったか、それに近いところに立っている——それが保守化ということだ。

そして、家庭には家庭の「エスタブリッシュメント」がある。自分の場合だったら、会費制結婚式でやって行けた。あのころはそんな時代で、とにかく自由だったのだ。それが息子、娘の結婚となると、へんなことすると世間様から白い眼で見られるぞ！

こういう気持が全体として集まって、それがまた個々にはねかえって、日本全体が「エスタブリッシュメント」になった。考えてみると、一九四五年、昔の日本がひっくり返って、そこで新しい日本が始まったとすると、ヨワイすでに三十五歳、わが日本、すでに「エスタブリッシュメント」にさしかかっているのだろう。その「エスタブリッシュメント」を個々の仕事での「エスタブリッシュメント」が支え、さらにまたそれを家庭での「エスタブリッシュメント」が支える。

ひところ、「家族帝国主義」ということばが若者のあいだではやったことがあった。あれから何年も経っていないというのに、もうそんな声はどこにもきこえない。いや、当の若者自身が結婚し、家族をつくり、それは自分では帝国主義ではないと信じているのかも知れないが、「新帝国主義」ぐらゐのこのありようを示しているのを当人が知らないでいるだけのことではないか。私は家族、家庭を否定しようというのではない。そこで根本のところから考えないとたいへんなことになるのではないかとかねがね考えているからだ。私が堺利彦のこの家庭論——と言うよりは、「実用書」を愛読し始めたのは何年もまえ、若者たちが「家族帝国主義」ウンヌンをさわぎたてているころのことだが、

愛読した理由、その第一は、堺利彦というすぐれた、そして、おそらく明治の革命以来日本の社会がもつただだひとりの革命家によって書かれた「家庭実用書」だからだ。彼は革命家であるにもかかわらず、この家庭の、また、子供をもつことの根本的意義から犬の飼い方、ネコの飼い方に至るまでを書きぬいた「実用書」を書いたのではない。革命家だから書いた。そして、もう一言つけ加えるなら、私の信じる革命とはそういう革命家がもくろむ革命だ。

2

余人は知らず、私は堺利彦は革命家だと思っている。

まず、大きなことを考えている。天下国家のことはもちろん、全世界、全人類のことだ。それを考えている。

考えるにあたつての独自の思想がある。もちろん、周知のごとく、彼の思想の根もとのところにあるのはマルクス主義だ。ただ、彼の場合、世の凡百のマルクス主義者たちとちがつて自由でもあればのびやかでもある感じがして来るのは、彼がまず根つからのデモクラットであるからだろう。

デモクラットの要件——まず、対等、平等をむねとしていること。つまり、天は人の上に人をつくらず。理屈ではなく、そんなふうにして生きていること。その上で、自由、独立、それから自分のことは自分で決める。たしかに堺利彦はそんな人物だった。そんなふうにして生きて、死んだ。

彼のマルクス主義もそれらデモクラットの原理の上にある。私の見たところ、彼はマルクス主義者になったから、無理をして、対等、平等をとなえるようになったのではない。世のしかつめらしいマル

クス主義者にはそういう手あいが多くて、ワイフ、弟子、子分、とりまきの上に君リンしながら革命を説いたりしたのだが、彼にはそんなことはなかった。彼の対等、平等のデモクラットの生き方がそのままマルクス主義につながって行っていた。マルクス主義が人類解放の原理だと説かれるとき、私がそんな気持になるのは堺利彦のことを考えるときだ。

3

もうひとつ、ここで大事なことがある。

独自の思想はいいが、それがえてしてひとりよがりの、手まえ勝手な思想になる。そういう思想を面白がる人も世の中には決して少なくはないが、それでは革命の思想にならないし、なつたとすれば、そんなものはろくでもない革命だ。

革命——そのまっとうであるものに必要な思想は、自分独自の思想であるとともに問題を全人類にあいわたるものとしてとらえた思想だ。つまり、その思想は独自のものであるとともに普遍をかたちづくっていること、それが革命の思想には必要なことだ。

と言うと、マルクス主義ならまさにそうじゃないかと言ひ出す人がいるかも知れないが、世の中、そんな甘いものではない。また、そんなふうにしてでき上った革命、でき上つたとすれば、ろくなものではない。

独自のことを考えて、しかもそれを全人類にあいわたる問題としてとらえるということは、一方で大きく視界をひろげることだが、もう一方で、その全人類を構成している人間ひとりひとりのことに思いを至すことにもなる。つまり、大きなことも考えるが、小さなことも考える。これが革命家の要件だ。もちろん、あつて欲しい革命の革命家としてのそれだ。社会のしくみのことを考えるのと同時に、人間のくらしのヒダのなか深くに入つてそこでものを考える。もちろん、革命というものも考えるのだ。

ただし、逆もまた正しい。

人間ひとりひとりのこと、くらしのヒダのたたまないのことも考えれば、天下国家、全世界、全人類のことも考える。

天下国家の革命のことを考えて、人間ひとりひとりの革命のことを考えない革命はとんでもない革命だ。そんなことは、もう今の社会主義諸国が十分に実例を示してくれている通り。ただ、人間の革命なつて、天下国家の革命なるというわけにもいかない。天下国家の大変革なしには人間のほうのそれもできかねるということも、十年ほど昔の学生たちの決起のときに十分に判つたことではないか。

6

つまり、二つがいるということだ、革命——そのまともなのを考えるとすれば、その実現を夢物語としてではなくまともな現実の問題として考えようとすれば。堺利彦が革命家だというのは、その二つのことを考えたばかりでなく、実際にもことを行なおうとした人間であったからだ。

7

革命家にこの「家庭の新風味」というような著作があるのは奇妙なことのように見える。しかし、それが少しも奇妙でないのは、ここでこれまでに書いて来たことを考えて下されば判ることだろう。彼は革命家であるのかかわらずこういう分類すれば「家庭実用書」のたぐいに入る本を書いたのではない。まさに、革命家だから書いた。

それは社会のこと、人間のことを考えるにあたって、いやでもそこにまたがつて存在する家庭という又エ的存在を考えざるを得なくなつたからにちがいない。いやおうなしに彼はそこに思考と実践の双方においてぶちあたつて、これを何とかせんかぎりは、と考えたのだろう。

8

家庭がやつかないのは、たとえば、マルクス主義という、ことの解明に大ナタをふるうことのできる理屈をもち出して来ても、とりこぼしがあまりにも多いことだ。たとえば、それで、その家庭全

体がどの階級にぞくしていることは判るだろうし、「家族及び私有財産の起源」の解明もなされるかも知れないが、「家庭の和楽」、そして、「一家団欒の趣」となると、こんなものはどんな論理、倫理をも超越してしまっている。まずそこには血縁、親子の縁、兄弟の縁につけ加うるに夫婦の縁という、本来は縁もゆかりもないはずの二人の個人が同居し、遠慮するところまったくなく抱きあい（あるいは、抱き合わないとおかしいということになり）、おまえのものはオレのもの、あなたのものはワタシのものという、互いに勝手に相手のものを使い、たいていの場合夫と称する一個人から妻と称する一個人は月給袋を強奪し、そして、妻と称する一個人を夫と称する一個人は当然のごとくタダ働きさせて晩飯をつくらせる——そういう不可思議の縁のこととなると、これはもう多分にふつうの論理、倫理のワク組みをこえてしまっている。たしかに解明の大ナタ、マルクス主義をもつて来ても、あまりに切れすぎるのか、それともスポンジを切っているみたいなものか。

そこで、えてして、家庭は手つかずということになる。ときたま「家族帝国主義フンサイ！」とわめきたてる手合いも出て来るのだが、それだって、そのうちどこかで恋愛、あるいは、見合いをして、結納をとり交わし、モンツキハカマに白いウェディング・ドレスで結婚式、それで自分でも家庭をつくって子供をつくってということになって行くと、もとのモクアミということになる。

このごろ、かつての学生運動の活動家たちに「子育て」に熱中しているのが多いときぐが、みんな子供を何故つくったのか、子供とは何なのか、なぜ子供を親が育てる必要（あるいは、権利）があるのかというような、彼らがかつて好んで世のよろもろに発することを好んだ根源的質問を自分に訊ねかけることなしに「子育て」を行なっているように見えて、そこはふしぎだ。

そんなことは自明、自然のことだということになっているのか。――

9

なっていないと考えたのが堺利彦だ。だから、そのひとつひとつに論理、倫理を考えて行こうとしたわけだ。彼はそうした家庭のもろもろの、ひいては家庭そのものの没論理、没倫理が結局のところ、社会と人間双方にわたつての変革、革命の大きな、おそらく最大の障壁であると見とつていたにちがいない。

没論理、没倫理をそのままにしておいては状況のおもむくままに流され、停滞して行くだけだ。これはまったくあたりまえの話だが、このあたりまえの話がなかなか通用していないことは今日でも同じ。かつて「家族帝国主義フンサイ！」を叫んだ活動家がよく結納をとりかわしてのホテルでの結婚式を親がかりでやったりする。私がかつての叫びと現在のその行為の論理的、倫理的矛盾を指摘すると、きまつて同じ答がたち返つて来る。すなわち、「親がよろこびますからね。それだけのことでですよ。」もちろん、ここで欠けているのは、次のいくつかの根源的な問いだ。親とは何か。子は親をよろこばせる必要があるのか。子が親をよろこばすとはどういうことか。親子とは何か。子とは何か。

家庭のもろもろ、そして、家庭そのものをそこまで根源的にきわめつくして考えようとしたのが、この「家庭の新風味」だ。だから、私はこの本は革命家を書いた本だというのだ。そして、本自体が革命的なものになっている。

今あげた根源的な問いのおしまいのところだけ、堺利彦に答えておいてもらおう。彼は言う。それ

は「つぎの時代の働き手」である。

明白な言い方で、これほどことの本質をついた言い方はないと私は思う。子供をつくる前提として「夫婦」があり「家庭」がある。そこらあたりのことについても、彼は原理を明確にうちたてる。「夫婦の目的……は相愛して家を成し、子を産み、そして社会の進歩を助けるにある。」そこから話は社会生活のことに及んで、「子供」をそのひろがりのなかでとらえようとする。

10

ただ、人間世界、すべてが理屈でわりきれぬものではない。まして、家庭というような人間世界ちゆうでもっとも人間世界的なものはどうしたって理屈からはみ出ぬものが出る。堺利彦のえらいところは、もっとも人間世界の革命のことを必死に考えた人間であるところは、人間世界のこういう理屈からのみ出しをよく認識していたことだ。これは人間世界のツムジ曲りのせいとも気まぐれのせいとも言えるが、堺利彦は人間世界の偉大のゆえととらえていたように私には見える。どんなにえらい主義主張をもつてきても、人間世界のふだんのもろもろ、それをこえる偉大なところがあると彼は考えていたのだと、この本ひとつからでも言えるにちがいない。堺利彦の魅力——革命家としての最大の魅力は、そうした持ち味にあった。原理は原理としてあくまで明確に立てる。しかし、人間世界への適用にあたっては四角四面にことを行なわない。これは逆にも言える。人間世界のややこしきにかまけて原理をおろそかにする怠け者でも憶病者でも、彼はない。

おしまいはこの本の叙述のなかで彼の持ち味がもつとも美しくあらわれている個所を書きぬいておこう。原理と人間世界と彼の三つどもえの関係が詩的な美しさをともなつてあらわれている文章だ。

子供は「つぎの時代の働き手」であると原理を定立したあとで「子に対する尊敬」を説いて言う。「我々が産み（あるいは産ませた）この子であるが我々が時計を作つたように、我々が家屋を作つたように、その作り方を知っているわけではない。我々はいかにしてその輝く目ができたかを知らぬ。我々はいかにしてその乳を吸うくちびるができたかを知らぬ、ここにおいて我々はある不可思議の力を信ぜずにはおられぬことになる。わが子はわが力をもつて作つたのではない。ある不可思議の力をもつて作られたのである。畢竟ある不可思議のものが、不可思議の力をもつて、我々の心に入り、我々の身によつて、我々の精神血肉の一部となり、我々の子として生まれて来るのである。そこでわが子とはいうものの、まつたくのわが子ではなく、不可思議（すなわち神）の子といつてもよい。我々は神の子をわが子として産むのである。『さずかりもの』という考え方はじつに至当であると思う。子に対する尊敬はここからわき出て来るのである。

神に対していえば『さずかりもの』、社会に対していえば『あずかりもの』、けつして親の私有物ではない。『あずかりもの』であるから大切にせねばならぬ。『さずかりもの』であるから尊敬せねばならぬ。私有物でないから親々の勝手にしてはならぬ。これが子に対する根本の心得である。」

つづきは製品版でお読みください。